

ラテンアメリカ都市物語

＝ 第5回 ＝

Buenos Aires という魅力

アルベルト 松本

日本では、ブエノスアイレスといえば「南米のパリ」として位置付けることが多いが、それは歴史的建造物や広場、劇場等をみると、紛れもなくヨーロッパ主にスペインのマドリッドやフランスのパリを連想させる雰囲気や町並みがあるからである。

私は、ブエノスアイレス郊外にあるエスコバルという日本人移住者による花卉栽培や観葉植物の生産が有

名な街で生まれ育った。高校時代から憧れのブエノスアイレスに仲間や家族と行くことはあったが、大学時代から留学で来日するまでは、この街に住んだことで多くの魅力を発見し、今も里帰りをするたびに新たなことを再発見し、体験している。

ブエノスアイレス (Buenos Aires) とは「良い空気」という意味で日本人にとっては響きのいい言葉だが、歴史のスタートは500数十年前に遡る。ペルーやメキシコのようにスペイン副王領の所在地として威厳と華やかさに満ちたものではなかったといえる。ラプラタ川の上流には「黄金の都市」があるとして1536年にスペインの先遣隊が築いた小さな砦が始まりであるが、先住民の激しい攻撃にあって結局それを放棄することになり、1580年6月11日に再度創設することになったのである。この二回目の日がブエノスアイレス市創設記念日で、それ以来徐々に街づくりが始まったといえる。当初はペルー副王領の管轄にあったため、独自の財源も貿易ルートもなくかつペルーやボリビアのように鉱物資源には恵まれていなかったため、スペイン以外の国と密貿易で少しずつ自立していくしかなかったのである。そして、1776年にめでたくラプラタ副王領になったのだが、にもかかわらずその流れは変えられずスペインのフェルナンド7世への忠誠を誓いながらも、1810年5月25日には「自治政府樹立宣言」(我が国の「建国記念日」である)をしたことで、この出来事がアルゼンチンだけではなくラテンアメリカ全体にスペインからの独立意識を高める結果を招く。

アルゼンチンの独立運動(戦争)には、やはりイギリスやフランスの非公式な支援が多かったこともあって、19世紀末からの制度作りと街づくりには、こうしたヨー



議会広場、その角には1916年に開店したエル・モリーノという高級カフェテリアがあったが、1997年に閉鎖され、議会に歴史的建造物として没収され、再オープンのために修復工事が行われている。(写真はいずれも筆者撮影)

ロッパの影響を強く受けることになり、今も健在であるブエノスアイレス市内の主要建築物や鉄道網等は1930年代ぐらいまでにほとんどが建設されたといえる。

ブエノスアイレスはアルゼンチン共和国の首都で、1994年の新憲法では「ブエノスアイレス自治都市(Ciudad Autónoma de Buenos Aires -CABA)」という法的位置付けになっている。面積は東京23区の3分の1程度で203平方㎞しかなく、そこに住民として290万人が居住している。しかし、市郊外の首都圏「Gran Buenos Aires」という複数の自治体を含めれば1,300万人の総人口になり、東京都とほぼ同じである。市内にはブエノスアイレス市庁舎や市議会だけではなく、国の行政府、立法府、司法府及びその関係機関が存在する。その他にも名門の国立・私立大学、文化施設、外資を含む大企業の本社、外交使節団等も、このブエノスアイレスに位置する。重厚な建物があるものそのためであり、セントロ(中心部)とその限られた周辺地区にほとんどが集中している。



市内観光バス、年間400万人前後の外国人観光客が訪れている

アルゼンチンは、アメリカ合衆国の影響も受けて連邦制度を採用しているが、実際は中央集権国家である。スペインから独立したときからこのことで地方と紛争になり、その内戦も半世紀以上続き、1853年に制定された憲法とその国づくりには様々な議論が交わされたのである。それでも、名ばかりの連邦国であるという指摘はいまだに強い。

いずれにしても、ブエノスアイレスはそうした戦いにも勝ち抜いて19世紀末から20世紀にさらに繁栄し、今に至る。実際の人口はそう多くなくとも、毎日郊外から通勤または通学してくる人は非常に多く、その結果バス路線も135本あり、時には荒っぽい運転が目立つものの市の内外を広範囲に結んでくれている。2011年からは、メトロバス(Metrobus)というバス専用道路が各地で

整備されていることでかなりスムーズな移動も可能になってきたが、やはりブエノスアイレスといえば南米では最も古く日本のより先に建設された地下鉄網である。近年路線も拡張されているが、一部ではこれまで日本の丸の内線等で使用されてきた中古車両が運行している。車両には日本語表記がそのまま残されているのだが、数年前大学時代の仲間と乗車していたら彼女達はそれが安心の証だと話していたことが印象的だった。当時、中国から購入した車両の故障が多かったことでそのようにコメントしたのかも知れないが、中古であってもメンテナンスが整っている日本の方が安心感を与えているようだ。

交通網が発達していることでブエノスアイレスはアルゼンチン最大の経済拠点であり、国内総生産60兆円(2015年統計)ちかくの2割ぐらいを占めている。市の経済は、金融・保険、不動産というサービス部門が最も大きなシェア(6割弱)を占め、商業、公共サービス、建築等で構成している。また、一人当たりの平均所得も国内では最も高く、現在の為替レートで米ドル換算すると24,000ドル(270万円相当)ぐらいになる(全国平均が13,000ドル)。とはいえ、インフレもまだかなり高いため(昨年2016年が42%、今年の予測が18~21%で、



9 de Julio大通りの真ん中にメトロバスが開設され、バスの運行もかなりスムーズになった

来年にはようやく1桁になる)、物価も上がっている分現地通貨ペソで賃金を得ている一般庶民の購買力はここ数年かなり低下している。今やブエノスアイレスで外食をしたり衣類等を購入すると日本よりも割高感を感じる。

しかし、こうした経済情勢の中でも南米諸国からの留学生が増えているのも事実である。以前から、近隣国の富裕層の若者がアルゼンチン各地の大学で学位をとることはあったが、ここ10数年前からは在留資格の緩和と国立大の無償化もあってその数が4~5万人になっているという。ブエノスアイレス郊外や地方都市に新たな国立大が創設されたこともこうした可能性を広げているが、多くの専門家は、このような方法で在籍率が増えなくても実際の卒業生が全入学者の5%から10%前後では、到底このような高等教育制度は維持できないと強く警告している。一方、大学生が多いところには専門書の書店が多いのだが、ブエノスには世界中からくる観光客や読書好きな人が訪れる有名な書店がある。その一つがもともと劇場だった建物を改修した「エル・アテネオ El Ateneo」という世界で二番目に美しい本屋さんである。ほぼすべての分野の作品があり、舞台だった奥にはカフェテリアがあり、本を買った後にそこで美味しいカプチーノをいただくことは至福の時間だと、私は思っている。

それでも、様々な専門分野にチャレンジする留学生の増加は起業率を高めており、ITやデザインではアルゼンチン人と南米出身者による新規事業が増えているという。外からのアイデアや多様性のある想像力はイノベーションに繋がっているということで、市当局は若者起業支援窓口や手続きの簡素化をサポートしている。

外国からやってくるのは、その他に観光客と近隣国移民である。ブエノスアイレスには、年間400万人前後が訪れており、ヨーロッパ風の建築物(美術館等)や演劇鑑賞(コロン劇場は、世界三大歌劇場の一つである)、書店めぐりなどを満喫するようだ。その時々、為替レートにもよるのだが、ブラジル人などが多いときもあれば、欧州やアメリカからの観光客が多い時もある。最近は格安チケットがあるので往復することはそう大きなハードルではないのだが、やはり食費と宿泊費がネックである。現在のようにインフレと物価が高いときは、一般のホテル以外にはウィークリーもしくはマンスリーマンションも選択肢の一つであり、レコレタ、パレルモ、ベルグラノという高級住宅街でも案外手頃な物件がかなりある(場所やメンテナンス状況等によるが、1泊30~50

ドルで十分にいい短期賃貸物件がある)。ウェブサイトから予約することができ、現地チェックインの際にオーナーもしくは代理人にドルで清算することができる。私も、里帰りの際はこうした物件を契約してブエノスアイレスでの滞在を効率よくする。バスや地下鉄「スブテ



エル・アテネオ書店、奥にはカフェテリアがある

subte」の駅が近ければどこにでも移動できるし、お酒落なカフェテリア(アルゼンチンでは「コンフィテリア confitería」ということが多い)で朝食をとることもできる。

近隣国移民に関しては出稼ぎ労働者が多いのだが、この流れはアルゼンチンの工業化がはじまった戦前からであり、ここ30~40年ぐらいはブエノスアイレス郊外だけではなく市内にもスラムが広がり、20万人が上下水道もなく、非合法的に居住しているという(ペルーやパラグアイからの移民も多いのだが、アルゼンチンの地方から来ている人が圧倒的に多い)。南米の大都市では高級住宅街のすぐ近くにもスラムが見られるが、ブエノスアイレスも例外ではなくバスターミナルがあるレティーロ付近には、もともと国鉄の土地だったところに今や大規模なスラムがあり、3万人近くが住んでいる。一部の



野菜市場だったアバストだが、今や立派なショッピングモールである

こうした地区では、新たな市や国の都市開発の下で基本的な公共サービスと低所得者向けの住宅が提供されるようになったが、この社会問題を解決するにはかなりの財源と時間が必要である。

それでも、つい最近レティーロ駅は完全にリニューアルされ、見違えるようになった。現マクリ政権になってから急ピッチで鉄道の整備と近代化を進めており、ブエノスアイレス郊外との交通の便も良くなることが期待されている。レティーロのカフェテリアで一服するのが、



レティーロ駅近くのスラム街 Villa 31

また新たな楽しみになる。

そして、旅行者であっても地元住民であっても、やはり都市でのもう一つの楽しみはイベントや散策であり、以前からあるドレゴ、フランシア、リバダビア広場のイベントだけではなく、最近は各種フェアも多い。単なる店が出店するだけではなく、その地区の店とも協力しながら特集企画を進めている。地方の農産品や特産品、何かをテーマにしているフェアである。昨年から、例えば酪農家のパティオ“Patio de Los Lecheros”というのがあるのだが、実際はアルゼンチンの国づくりに貢献してきた移民コミュニティのグルメフェアなのである。当然、ここには日本も含まれており、日系人の出店が並ぶのである。

近年の傾向として、地元日系社会のこうしたフェアでのプレゼンスが目立ってきている。和食ブームということも影響してか、多数の日系人が既存の日系団体のイベント以外でも出店するようになり、積極的に日本的なメニューを提供している。非日系人にも親しまれるようにアレンジされたものも多々あるのだが、法被等を着て威勢よく営業している姿がみられるようになった。ブエノスアイレス市の主催で開催されている日本祭り“Buenos Aires celebra Japón”も定着してきており、特に若い世代の日系人が日本の文化やグルメ等を地元社会に紹介しているが、幸い多くの参加者に好評である。

それから観客といえば、やはりブエノスアイレス市内ではボカジュニアーズ (Boca Juniors) やリベルプレイ (River Plate) という名門サッカーチームの試合でみられることだが、両者のホームスタジアムは市内にあり、市民生活には欠かせない娯楽であって、血の気の多いサポーター同士の応援対決でもすざましいものがある。しかし、こうしたクラブチームや民間クラブはサッカー以外の競技にも熱心に取り組んでおり、施設が充実していることもあって、パンアメリカン競技大会やオリンピックでも活躍している多数のアスリートが所属している。また、それを支えている何万人という会員がいる。

昨年はブラジルのリオでオリンピックが開催されたが、来年はブエノスアイレスで国際オリンピック委員会が認定している青少年オリンピック“Juegos Olímpicos de la Juventud Buenos Aires 2018”が開催される。これも4年ごとに開催され、2014年は中国の南京で行われている。来年の10月6日から18日の間に、206カ国と地域から3,786人の少年が31の競技で競うことになる。すべての施設が市内にあり、急ピッチで修復工事や観客席数の整備を行っているようだ。世界中の若者やその関係者が訪れることになるが、ブエノスアイレスではまたきっとたくさんの物語が生まれるに違いない。

(Alberto Matsumoto IDEA NETWORK 代表)

参考記事

- (1)Sofia Terrile, Buenos Aires, en la liga de las ciudades con economías más diversificadas, La Nación, 2017.3.5
- (2)Sebastian Clemente, Eventos deportivos: oportunidad para grandes ciudades, Clarín, 2015.7.27
- (3)Ferias, mercados y paseos de compras, Ciudad de Buenos Aires.
<https://turismo.buenosaires.gob.ar/es/recorrido/ferias-mercados-y-paseos-de-compras>
- (4)Sebastián Clemente, Tras acordar con vecinos, avanza para urbanizar otras dos villas, Clarín, 2017.2.26
- (5)La UBA ocupa el puesto 75 en el ranking de las mejores universidades del mundo, La Nación, 2017.6.7
- (6)市内の観光名所やツアー（無料・有料）、イベント情報など満載で、英語でも提供している。
<https://turismo.buenosaires.gob.ar/en>



『猿神のロスト・シティー 地上最後の秘境に眠る謎の文明を探せ』

アダグラス・プレストン 鍛原多恵子訳 NHK出版
2017年4月 380頁 2,200円+税 ISBN987-4-14-081716-2

ホンジュラス東部カリブ海側、ニカラグアとの国境寄りの地域は、マヤ文化圏から離れているが、そこにも古代文明の遺構があることはコルテスのアステカ侵攻の頃から伝えられ、黄金があるという伝承に釣られて時折近づこうと試みる者がいた。「白い都市」と人々が呼ぶ遺跡に踏み入ったという者の信憑性の定かでない見聞や売りに出た彫像などの遺物、そこには猿の巨像が埋まっている噂話から「失われた猿神王国」と人々に知られていたが、その後送り込まれた幾つもの探検隊で白い都市と猿神王国の存在を立証出来た者はいなかった。

しかし、この20年程の間にNASAが撮った精巧な航空写真とそれを解析する技術が進歩して、密林に隠れた地形も読み取るライダー画像解析により、間違いなくこのラモスキティア（La Moskitia）山中に大規模な遺跡の存在を確認できるようになって、写真家エルキンスは、2010年にまずライダーでの現地探査許可と国立人類学・歴史学研究所 IHAH の協力をホンジュラス政府から取り付けた。博物館に関わるライターをしてきた著者が写真家、映画プロデューサー等とともに加わったチームは、2012年のライダー調査で絞り込んだ谷間の3地区に遺跡が存在することを確認し、2015年にいよいよ軍の支援も得て、IHAH や考古学、人類学、植物学者も加わった調査隊が地上から入ることとなった。深い密林、豪雨による泥濘、毒蛇などに阻まれ調査は難航するが、遺構の一部と多数の露出している遺物、石版、彫像を見つけた。調査は空軍とチャーターしたヘリコプターの使える期限等の制約からいったん終結され、ここまでの成果はホンジュラス政府とメディアによって大々的に発表されたが、その後この調査の手法や構成、考古学調査そのもののあり方をめぐる学界との論戦、調査団員の相次ぐ熱帯感染症の発病があり、著者達の再訪は2016年になり実現し、エルナンデス大統領も視察に訪れその地を「ジャガーの都市」と宣言した。

本書はジャーナリストが書いたものであるが故に一部誇張や誤解があり、肝心の遺跡や遺物の記述が実見録に留まっていた考古学的視点からの観察でないのが物足りないが、目まぐるしく変転する政情の中でチームが調査計画を進める描写はホンジュラスの実状をも垣間見せてくれる。

（桜井 敏浩）



『日系文化を編み直す 歴史・文明・接触』

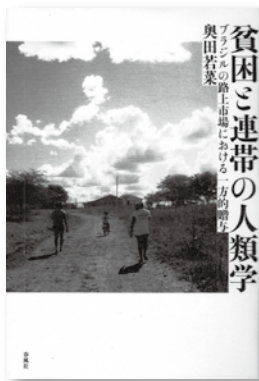
細川 周平編著 ミネルヴァ書房
2017年3月 427頁 8,000円+税 ISBN978-4-623-07883-7

日本の文化・歴史を国際的な連携・協力の下で研究する大学共同利用機関である国際日本文化研究センター（日文研）が、内外研究者との移民研究の一環として日系文化を幅広く共同研究した成果を纏めたもの。

第Ⅰ「記す」は自分の半生や記憶を移民史に繋ごうとしたアルゼンチン、ブラジル、チリ等4人の文芸人について、第Ⅱ部「伝える」は日本からの出版物輸入や往来から思想・経験を伝える媒体・作家等を、第Ⅲ部「詠む」は日本語文学の特徴である川柳・短歌・俳句を、第Ⅳ部「競う」ではブラジルの野球、ペルーの運動会等のスポーツ行事を、第Ⅴ部「交わる」はハワイ音楽、日系人とマンガを、第Ⅵ部「渡る」は移民という空間移動において、沖縄系ブラジル人の三線、呪術的宗教、ブラジルでのデカセギ者向け代理店と邦字新聞社、帰国デカセギ者のリマ日系社会での再適応とその影響をそれぞれ論じている。

戦前海外へ渡った移民総数はその間の総人口のほぼ1%に過ぎないが、その数百万人の子孫の存在は日本史、日本人史、文化研究で取り上げるべきとの24人の寄稿者に共通する確信が、書名の「編み直す」に込められている。

（桜井 敏浩）



『貧困と連帯の人類学 ―ブラジルの路上市場における一方的贈与』

奥田 若菜 春風社

2017年2月 354頁 3,700円+税 ISBN978-4-86110-532-6

日本でも「絆」という言葉が多く使われるようになったが、格差が大きいブラジル社会において社会階層をまたがる連帯、困窮者への贈与・支援の具体的な方法と実態を、ブラジルの路上商人たちの間での一方的な贈与のあり方を数々の事例を描き出すことで、横の繋がりのみならず縦の繋がりの可能性を問い、異質な者同士の繋がりがこそが社会の不平等を是正していくための連帯として必要と説いている。

文化人類学を専攻する若手研究者としてブラジリア大学で富裕層の中で暮らし、その後貧困地域で計3年間調査研究した著者が、金持ちと貧乏人の空間を行き来し、路上商人の生活実践、稼ぎの「汗をかいいたカネ」、誰かを助けるためにつかわれた「伸びるカネ」、一方的贈与でのねだり、物乞いなどを多くの事例で紹介し、贈与の義務と危険性、持つ者と持たざる者を白日の下に曝すことによって、「正しい」そして「誤った」贈与などを理論的に整理している。その上で、連帯の作法を「正しさの規範」と「善さの規範」という二つの規範から明らかにし、貧困に対する責任は誰にどこまで課されるのかという責任の領域の考察もしつつ、一方的贈与行為が互いに連携することで「社会的つながり」の構築になるのではないかと、社会的連帯の可能性を探っている。

(桜井 敏浩)

「ラテンアメリカから世界を見る」

協会主催の講演会・セミナーに積極的にご参加ください

ラテンアメリカ協会では、毎月、講演会・セミナーなどのイベントを開催し、ラテンアメリカ政経文化の最新事情の提供と日本とラテンアメリカの相互理解の向上に努めております。新規イベントは都度、当協会ホームページの「講演会・セミナーのご案内」および「イベント・カレンダー」に掲載するとともに、会員向けのメールマガジン（新着情報）でお知らせしております。多くの皆様のご参加をお待ちしております。

< 最近のイベント > (詳細は協会ホームページのイベント欄をご覧ください。)

2017年

4月25日 講演会「ラテンアメリカにおけるエネルギー産業の展望」

石油天然ガス金属鉱物資源機構 船木弥和子主任研究員

海外電力調査会 上嶋俊一主任研究員

4月27日 講演会「中米・カリブ諸国の最新情勢とIT事情」

外務省中南米局 橋場健中米カリブ課長

国際社会経済研究所 原田泉情報社会研究部部長・小泉雄介
主幹研究員

5月12日 ラウンドテーブル

アグスティン・ピチョット・ワールドラグビー副会長



5月18日 講演会「メディアを戦力として考えるーラテンアメリカを念頭にー」

赤阪清隆フォーリン・プレスセンター理事長



5月29日 講演会「ベネズエラ危機下における平和の模索」

セイコウ・ルイス・イシカワ 駐日ベネズエラ・ボリバル共和国大使



6月2日 講演会「今日のメキシコ～ NAFTA 再交渉と国内外の課題」

山田 彰 駐メキシコ日本大使



6月7日 ラウンドテーブル

ホセ・パブロ・ロドリゲス コスタリカ貿易振興機構アジア
太平洋局長